

岡先生の教え

高畑時子

まず、岡道男先生の突然の御旅立ちを謹んでお悼み申し上げますとともに、心から先生のご冥福をお祈り致します。

岡先生が京大を定年退官される前年に私は京大へ参りましたため、先生の京大での最後の授業を拝聴する幸運に恵まれました。先生のローマ文学の御講義、ホメロスの演習を拝聴できたのは大変貴重な経験でした。御講義でも演習でも毎回数枚のギリシア・ラテンテキストを配られ、それを和訳して下さりつつ説明して下さるのです。京大では学部の講義で既に原典テキストが使われるのか、と当時レベルの高さに驚嘆し、かつ、これが先生のようにその場で辞書なしですらすら読めるようになったらどんなにいいだろう、とさらに古典語を学びたいと思う気持ちに駆られたのを今でも覚えています。和訳も付いていない沢山のテキスト資料を目前にした時は、一瞬萎縮してしまいましたが、その時先生は、古典語よりも英語など現代語の方が訳すのは難しいのです、と御講義中さりげなく仰られ、当時学部聴講生で、恥ずかしながら院試のため英語の勉強を一からやり直していた私は、そういった意味でも勇気づけられました。今思えば、聴講生の頃が一番必死でした。同志社大の学部生だった頃、故日下昭夫先生に講演のため来日された Andreas Spira 先生に個人的に会わせて頂き、あなたはいずれドイツへ行くでしょう、と仰って頂いて以来、念願だったドイツ行きを、院入学後に計画してからは、岡先生とお話しさせて頂く機会を持てるようになりました。先生は定期的に文通もして下さい、それがどんなに心の支えとなったか分かりません。随分ご迷惑だったと思いますが毎回5枚も書いて送って、先生のお返事をポストで見つけたときは飛び上がるほど嬉しく、はやる気持ちを押さえながらおそろおそろ開封したものです。今、過去に先生に送った手紙を読み返してみると、毎回体験したことと一緒に反省文も書いていて、岡先生に手紙をお送りすることは、自己を見つめ日頃の行いを反省する良い機会でもありました。

先生より頂いたお手紙の中で、まだ留学前、語学力を出来るだけ磨いておくように、そうでないと折角古典学の本場へ行っても宝の山を目の前にしてそれ

に全く気が付かないことになる、と御注意頂きました。全く、現地へ行って語学力のあるのとないのとでは雲泥の差で、未だに自分の未熟な語学力のせいで損をしていると思うことが度々です。次便では、語学も研究も完全に修めることなどできないのだから、ある程度力がつけば行ってよい、と仰って頂き、こちらへ参りました。

留学後、先生の思い出の中で最も嬉しく忘れられないことがありました。一昨年のクリスマスの頃、論文の締切があったためいくつかの親切な家庭やゼミの友人からの執拗な自宅への招待を全て断り、一人寮に残っておりましたが、今までふんだんに時間があったのにぎりぎりになって慌てて、しかも自分は何と友達付き合いが悪いのだろうと、何故か最も落ち込んでいた時がありました。そこへ、全く予期せず先生から一通の桜の花のクリスマスカードが届きました。人気のない寮の郵便受けの前でカードを握りしめ、その暖かさに涙が出ました。私の窮地を察して救いの手を差し延べて下さったのだ、何と有り難いことなのだろうと思っています。こちらへ来る前、色々なことに上手くいかず悩んでいた時でも、先生はいつも見ていて下さいました。自分が逆境にいる時にかかわって下さる方こそ有り難い存在なのだということが、今ようやく分かりました。岡先生にお手紙を出したときは必ずお返事を下さっていましたが、最後にキケロの御訳書と近所の子供にあげて下さい、との添書で美しい兎の5組対の切手を頂いてから、何度お手紙を出してもぶつり音信が途絶えました。岡先生は一体お元気でいらっしゃるのだろうか、それともただお忙しいのか、ずっと気がかりでしたが、一度人に岡先生のご消息を伺いたいと思いつつ、何故か聞いてはいけないような気がして結局尋ねることができませんでした。最後のお手紙から8カ月後、先生の訃報を知りました。これらの心温まるお手紙等は今や先生の形見となってしまいました。まさか4年も前から、重いご病気だったとは全く知りませんでした。さぞかしお辛かったでしょうに、何一つ、つらさを仰有らず、他人に心配を掛けず、ただでさえお忙しいのに私のつまらない手紙や拙稿にもきちんとお返事を下さり・・・とても自分には真似できません。

知らせを聞いて、留学中の生活などを岡先生にお手紙で知らせ、そのお返事を頂くのを楽しみにしていたのに、岡先生だけは私のことを憶えて下さっているということが私の心の支えだったのに何故こんなに早く逝かれたのか、これから一体私はどうしたらいいのだろう、と絶望感にとらわれる日々が続きまし

たが、後に、先生が今際の時に周囲の人々にお礼を仰って、後に残る人々のことを気遣いながらやすらかに往生されたということを伺い、やっと落ち着きました。私は少し風邪を引いただけでも自分以外のことは考えられなくなるのに、先生は最期の最期まで他人のことを気遣っておられ、それに引き替え、先生の死に際してすら、自分のことを考えていた私が全く、恥ずかしくなりました。

最後に頂いたお手紙の中で、今後私がやるべき事を書き残して下さっていたのだと思っております。それを読んだ当時は意味が分かりませんでした。後にそれと同じテーマを偶然、あるゼミで指導教授から与えられました。

今、研究室の研究旅行でシチリア島へ来ているのですが、長年 Marburg 大の古典学図書室に勤めている Heidelrose Blatt さんという司書の方と同室になり、たまたま研究室の前教授の話が出ました。私は京都にいた時分、Joachim Adamietz のキケロのレトリックや弁論に関する論考に感銘を受けたのですが、この大学のギリシア文献学前教授の Otto Lendle が亡くなる際、ラテン文献学の Adamietz 前教授に、あの世で待っている、向こうでまた話そう、と仰ったのだそうです。Lendle の死の3年後、Adamietz はまだ在職中の62歳の時、交通事故で亡くなったとのこと。何故これを書くのかと申しますと、突然の岡先生のご逝去の直後で、中務先生から、岡先生は学問故に至福のエリユシオンへ昇られWalter Marg や Wolfgang Schadewaldt と語っておられることだろうと伺い、ああそうかも、と思ったことがあるのですが、それと何か通じるものがあるかと、ハイデルローゼさんからこの話を聞いた時、はっとしたからです。

私などが先生と同じ世界へ辿り着けることは到底あり得ないけれども、もしもこの世でなるべく正しく一生懸命生きればいつか岡先生が一瞬でもお会い下さる機会が、万に一つでも持てるのではないか、生前会っていて心から尊敬していた人と死後もほんの少しでも会える可能性があるとするれば、生きていて人と巡り会うということは、何と素晴らしいことか、と思いました。日下先生のご生前に最期にお会いした時、この世で人と人は大変僅かな確率で巡り会うのであって何気ないことが実はとても貴重なことなのだ、と仰られたことが今ようやく分かったような気がします。今は、岡先生と偶然出会い、教えていただくことが出来たのは大変な幸運だったこと、岡先生に紹介状をお願いし、同志社の先輩に Marburg の Schmitt 先生に会わせて頂いたことに端を発した、指

導教授と私の全く偶然の出会いも岡先生は本当に良かったと喜んで下さったこと、私を導き、常にかかわりを持って下さったことに心から感謝しております。岡先生、本当に有り難うございました。今ではやっとこれを心から申し上げることができるようになりました。

シチリア島Mazzaroの海岸にて